

「口演童話」関係資料収集・公開プロジェクト

利用音源：古村覺氏録音／所蔵音源

●久留島武彦翁の口演● デモクラシーのお話（上）

【はじめに】 武彦翁がまいた「夢のタネ」、武彦翁や口演童話の関係資料・情報があればご一報を

■ 今から半世紀前、日本各地を口演童話を語り「夢のタネ」を子供の心に蒔いて歩いた、お話の上手なおじさんがいました。明治大正昭和と日本にとって厳しく悲しい時代に「子供こそが次の世代の宝である」の信念のもと、児童文化の発展に尽くした口演童話家、それが久留島武彦です。

■ 口演童話とは子供たちを前に童話を語る児童文化の一つで、

今日盛んな絵本の読み聞かせとは違い、口演者（語り部）は身ぶり・手ぶりと言術だけで聴衆をひきつけなくてははいけません。対象は子供たちなので、年齢層・時季・会場・地域などの条件によって、話し方には変化が生じます。

■ このため、翁本来の足跡を知る方法は、活字化された講演録や伝記に加え、録音された“声の響き”に触れる必要が求められます。

明治末期から昭和 30 年代にかけて、全国のこどもたちを魅了したその話術の片鱗を、このデジタルブックでお楽しみ下さい。

■ 久留島武彦倶楽部では、書物では表現することが難しい口演童話における『声や響き、言葉の間』の大切さを知ってもらうため、武彦翁本人の肉声をデジタル化する事業を進めており、さらなる音声資料デジタル化をめざし口演童話関係の資料を収集しています。資料や情報があったら当倶楽部にお寄せ下さい（連絡先は巻末に記載）。みんなで後世に残るデジタル資料を充実させていきましょう。

久留島武彦倶楽部 主宰 桑野 英司

【口演の聞き方】 次ページ以降、ページ左下にON、OFFボタンがあるページでボタンをクリックすると、音声の再生・停止ができます。最初にONボタンを押すと「マルチメディアコンテンツに関する信頼性を管理」という画面が立ち上がります。内容を確認した上で、その画面にある「再生」ボタンを押してください。音声の再生が始まります。

（音の大きさは、パソコン本体の「音量調整」で行って下さい）

(資料：到津の森公園)

「デモクラシーの話」の背景

■昭和 27 (1952) 年、北九州の到津遊園 (いとうづ ゆうえん、現「到津の森公園」) を舞台に開かれた「北九州地区幼稚園大会」で、園児たちを前に久留島武彦翁が行った口演が、この「デモクラシーの話」。デモクラシーという大人でもなかなか理解できない概念を、カラスさんやネズミさんなどが互いの力を活かし、力を合わせて頑張る物語りを通して面白おかしく、子供たちをぐいぐい引き込みながら語りかけている。到津遊園の古村覺氏がオーブンリールテープに録音した。

久留島翁 (左) と村上巧児氏 (右)



林間学園で子どもたちを前に語る久留島翁

■到津遊園は西鉄の前身、九州電気軌道が昭和 7 (1932) 年に開園した。後に西鉄の初代社長となった村上巧児氏が久留島翁と同じ大分県出身で子供の頃から知り合いだった縁で、昭和 12 (1937) 年から、久留島翁を初代学園長とする林間学園をスタートさせた。林間学園は今なお続き、久留島翁らの思いが連綿と引き継がれている。

到津の森公園 (旧到津遊園)：福岡県北九州市小倉北区上到津 4 - 1 - 8

■デモクラシーの話（上）

今日は一つの記念に、み～んなが分からないお話をしようと思う。

とても前の方に腰掛けている子どもなどは何のお話か分からんだろう。

分かったらエライもんであります。ほめてあげて下さい。

それはデモクラシーっていうお話だ。

お父さんに聞いて

「おとうちゃん、デモクラシーってなに？」「あ～、そんな難しいことは分かん」

「おかあちゃん、デモクラシーってなに？」「あ～、そんな難しいことは学校の先生にお聞き」

「先生、デモクラシーってなに？」・・・

そこで私は今日これからデモクラシーのお話をする。

みんなが分からずに眠ってしまったらば、何と面白いだろう。

森の中にこれだけの人がいびきをかいて「ぐーぐー」「ぐーぐぐ」

それこそ私には良い見ものであります。

じゃあ、これからお話をしますよ。

「カア、カア、カア、カア」と鳴くカラスが、「オレも遊びたいな、だれかお友だちと」

「だれがよいだろう」

考えたが、

「いっそお友だちと遊ぶなら、違ったお友だちをつくろう」

「あっ、あっ、あそこにチョロチョロチョロチョロいるやつが…。あっ、あれは土ネズミだな。

あれとお友だちになったら面白いだろう」。

わーとカラスは舞い降りてきて、

「おいおい、おい、おいおい、お前、どこ行くの？」

「ボクね、ボクきょう遊びに行くの」

「遊びに～？どこ遊びに行くの？」

「まだ……。これからお友だちを探して遊ぼうと思うの」

「そう、じゃあボクといっしょに遊ばないかい」

「いやだー。カラスさんと遊んだら、お前のそのクチバシでオレの頭を……」

「ううん。友だちになったら頭たたかんよ」

「でも、ときどき学校の子どもが友だちの頭をが～んとやってるで」

「あれは人間のできそこないだよ。カラスはお友だちになったら、お友だちの頭などはたたかんよ。頼むからお友だちになってくれよ」

そうするとネズミが

「それならねカラスさん。あそこに池があるだろ。あの池の中にボクのお友だちがおる。そのお友だちに相談して、それが良いと言うたらお友だちになろう」

「池？だれだい？だれでもいいからお前さん池のそばに行っといで」

カラスは「だれがネズミのお友だちだろう？」と思って、「かー、かー、かー、かー」

行ってみると、池の水はきれいに澄んで

「なーんにもいないようだ。おやっ、ネズミ、ウソをついたかな？」と思って見ておると…

ネズミはチョロチョロチョロチョロと飛んできて、長〜いしっぽを出して池の水をピシャピシャピシャピシャ、ピシャピシャピシャピシャとたたく。

池の外の泥がムクムクムクムク、と動きはじめる。

カラスは「あ、あ、あ、あ、あ。変なヤツが出てきたぞ」と思うと、

このくらいな丸い、お手ても足も短〜い、シっぽもある……………なんでしょ？

そ〜うそう、カメが泳いで出てきた。

「ネズミさん、何の用事だい今ごろ」。

「あのカメさん、カメさん。あすこにカラスがとまっているだろ」「あれがな、オレに友だちになってくれろと言うんだよ。どうしよかな」

「あ～そうかあ。オレは水の中におるから、深～いお話ならできる。オマエは畠におるから広～いお話ならできる」

「けどオレもオマエも高～いところに上がることができないから、高～いお話は分からだろ。カラスがお友だちになったら、カラスが高～いところから見たお話をしてくれるだろ」

「そうするとオレは深～いお話をして、オマエは広～いお話をする。そうすると、いろんなお話がまとまっておもしろいぞ。友だちになっておあげよ。友だちになっておあげよ」

そう言うと、ネズミが

「まあ、それならオレも友だちになってやろう。じゃあいいか、カラスとお友だちになるぜ」

「カラスさん、カラスさん、じゃ友だちになるからな。オマエさんは高いところから見た世間の話をしてくださいよ」

「ああ、ありがとう、ありがとう。じゃあ、まあカメさん、どうかよろしくお願いします。ネズミさん、どうかよろしくお頼みします」。

言うた言葉の終わらんときに、「ドーン」という鉄砲の音がした。

カラスは自分がうたれたのかと思って、

「ガア、ガア、ガア、ガア、ガア、ガア」。竹やぶの中に真一文字に飛び込んだ。

カメはおどろいて、まっ逆さまになって池の底にぐぐっともぐった。

ネズミもおどろいて、ちょろちょろちょろちょろちょろちょろ、竹の根っこにチョロリと入ってかくれた。

そこにバタバタバタバタバタバタ・・・飛んできたのはシカであります。そのシカが池のそばまで来ると、バタッとたおれた。

カラスは「あっ、シカがうたれたなあ。だ～れがうったろう」と思って、（高いところにおるから遠くが見える）、ヒョイッと見ると、けむりの出る鉄砲を持ったお百姓さんが、ここにシカが倒れておるのに、向こうの山のほうばかりを見ておる、鉄砲を持って。

カラスはそれを見ると

「あはは、はは、あははあ、バカだなあ。こ～こにシカが倒れておるのに」

「あはは、あ、間違えてあの山の中に入っちゃった。目の付け所が低いと分らんかなあ。ここにシカが倒れておるのに」

「シカさん、シカさん、オマエうたれたのかい？」

そうするとシカは「はあ、はあ、はあ」と言いながらヒョロヒョロと立ち上がる。

「やあ、うたれたのじゃないけどもな、弾が耳と角の間をヒューッと通って、アタシャ、ビククリして逃げて、そこまで来たらば、竹の根っこにツメを引っかけてパターッと倒れてわき腹を打って、痛くてたまらない。カラスさん、お百姓さんがそこいらにおるだろう？」

「ははあ、お百姓さんはな、目の付け所が低いもんだから、オマエがここに倒れているのを知らない。見当を間違えて、向こうの山の中に入っちゃったぜ」

「やあ、カラスさん、どうかお願いだから、アナタ、そこから番をしとってください。お百姓さんが出てきたらば私に教えてください」

「ああ、だれが人間なんかにおマエを打たしゃせんよ。安心して、まあ、池の水でも飲んで精をおつけよ。人間というヤツは悪いことをするヤツだなあ、いきなり鉄砲をうったりなんかして。まあ、早く元気を出して、水でもおあがり」

そういうとシカは「じゃあ、まあ、ありがとう。カラスさんどうぞ番をしとってください」。

ヒョロヒョロヒョロヒョロと立って、泥にごりをした池の水に口をつけて飲もうとすると、泥水の中からカメを頭をヒョイと突き出して「まあ、よかったなあ」

「わあ、びっくりした。あ～、おどろいた。なんだ、オマエはカメさんじゃないか」

「あ～おどろいた、オレは鉄砲が出てきたかと思った。まあオマエの頭はよう鉄砲に似ている」

「あ～おどろいた、オマエさん。水の中から鉄砲をうったかと思った……。ちょっと水を飲ませてくださいよ」

「まあ、いくらでも飲んで元気をつけなされよ」

ヒョロヒョロヒョロと歩いて水に口をつけようとする、足元の竹の根っこのそばからネズミがチョロリと頭を出し

「まあ、シカさんよかったなあ」

「わっ、あーびっくりした。な～んだオマエはネズミ。オマエはカメ、オマエはカラス、な～んだい妙な取り合わせだなあ。カラスさんとネズミさん、カメだ。オマエたちはここで何をしているんだ」

そうするとカラスが

「なあシカさん、ワシらみ～んな違うものが仲良しになるといろんなお話ができる」

「ワタシャ高いところから見るだろ。カメさんは深いところで考えるだろ。ネズミさんは広いところを飛んで回って調べるだろ」

「高い話と深い話、広いお話が寄ると、たいがい賢くなるもんだ」

「どうだ、オマエさんも友だちにならんか」

「そうするとオマエが山の話をする、ネズミが原の話をする、私は空の話をする。カメが水の話をする。そうするともう世の中のことはたいがい分かるぜ」

「はあ、それはありがたいなあ。じゃあ明日からどうか仲間に入れてもらいたい」

「じゃ、カラスさんお願いします。ネズミさんお頼みします。カメさんどうかよろしくお願いします」

カラスはうれしかった。いちどきに、お友だちが三匹。

「じゃあ、まあ明日の朝は早くやってきましょう。シカさんも早くおいでよ」

そうするとシカは

「ワシは何か怖いようだ。まだそこいらにお百姓さんがおったらば、うたれるかもしれんから、先に帰りますぜ。じゃあ、さようなら、さようなら、さようなら」
足が長いから、チョイチョイチョーイと飛んで帰った。

カラスは「さよならー、さよならー、さよならー」

ネズミは「さよなら、さよなら、さよなら、さよなら、さよなら」

カメは〇〇だから頭を下げながら「さよならー、さよならー」もぐって一晩たって翌朝、

(「デモクラシーの話(下)」に続く)

■久留島武彦翁

久留島武彦は、明治7年、豊後森藩12代藩主の孫として現在の太分県玖珠町森に誕生しました。巖谷小波とともに、わが国の近代児童文化の礎を築いたことで知られ、口演童話や児童劇の開拓者でもあります。明治末期に、児童の社会教育機関としてお伽倶楽部を創設し、この全国普及にも努めました。童話ラジオ第1号も武彦の声によるもので、彼は書く童話作家よりも、話す童話作家の道を選びました。こどもの膝の前の友達になりたいと考え、大正期から亡くなる昭和30年代まで、盛んに全国を口演行脚しています。昭和35年没(享年86歳)。



■久留島武彦倶楽部

武彦翁の口演童話の素晴らしさを広めようと、太分県内外の研究者、歴史愛好家らが2007年5月に結成したボランティア組織。主宰は玖珠町在住の桑野英司氏。関係著作権者から著作物公開等に関する委任を受け、資料・情報の収集と公開に務めている。関連資料／情報をお持ちの方は、下記事務局へ

〒879-4413

太分県玖珠郡玖珠町塚脇「とんかつ東華」内 久留島武彦倶楽部

■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、太分合同新聞社と学校法人別府大学が、太分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN(なんなん)」の一環です。NAN-NANでは、太分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていききたいと願っています。情報があれば、ぜひNAN-NAN事務局にお寄せください。

久留島武彦翁の口演：デモクラシーのお話（上）

2007年12月21日初版発行

編集 久留島武彦倶楽部

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター地域連携部

発行 NAN-NAN事務局

〒870-8605 太分市府内町3-9-15 太分合同新聞社総合企画部内

©久留島武彦倶楽部